

200805028A

厚生労働科学研究費補助金
厚生労働科学特別研究事業

女性の健康状態を的確に評価するための調査項目等に関する研究

平成20年度 総括研究報告書

研究代表者 水沼英樹

平成21（2009）年4月

平成20年度厚生労働科学研究費補助金事業報告

【研究課題名】

女性の健康状態を的確に評価するための調査項目等に関する研究

【文献番号】200805028C

水沼英樹¹⁾、林 邦彦²⁾、松村康弘³⁾

- 1) 弘前大学医学部産科婦人科、
- 2) 群馬大学医学部保健学科
- 3) 桐生大学医療保健学部

はじめに

多くの疾患はその発生要因や様相が個体の生物学的年年齢に依存していることが知られていたが、更に近年では疾患の発生そのものの発生に対し性差が関与する、すなわち女性と男性とでは罹患率や進行の様相が異なることが知られるようになってきた。例えば骨粗鬆症は閉経後女性に特有な疾患として知られ、心筋梗塞は女性に比べ男性に多く見られる疾患であるが閉経後女性では男性と同じ頻度で発症するようになることが知られており、また、女性の健康課題としても、例えば、女性ホルモンの分泌に関連する「更年期症状（うつ等の精神症状を含む）」や「月経異常症」等、若年期における「過度なやせ志向や栄養摂取の偏り」等は年齢依存性の疾患であることが指摘されている。このような疾患における性差の関与や好発年齢の存在などを踏まえ、最近では「性差に基づいて健康づくりを推進することや疾病管理を行うこと」の重要性が指摘されてきた。しかしながら、その一方で、更年期障害や若年期の栄養摂取等に関する疫学的なデータは必ずしも十分ではなく、性差や年齢を考慮しての予防法の確立のためには女性の健康状態について大規模な実態調査を実施し十分な情報収集が求められている。本研究はその事前の準備として、文献を整理し十分に分析し、エビデンスのレベルが高くコンセンサスを得ている分野と、さらなる疫学的調査が必要な分野を明らかにすることを目的とした。

方法

本研究は、文献レビュー及び各分野の研究者からの意見聴取を参考として健康課題とされている事項のエビデンスを評価することであり、これにより、女性の健康実態を把握するための調査項目と調査の方向性を明らかにすることである。女性の健康づくり推進懇談会委員の意見も踏まえ、以下の手順で健康課題の整理を行った。

- 1) 女性の健康づくり推進懇談会委員に各専門分野における健康課題や問題点の提示を依頼した。
- 2) 女性、性差、ライフステージ、健康、疫学をキーワードとして医学中央雑誌から過去5年間における論文集積を行った。これまでに女性の健康に関する厚生科学事業報告については平成9年まで遡り関係する報告を猟集した。

3) 上記のキーワードに加え、若年妊娠、性感染症、口腔疾患、栄養素、食事、喫煙、るいそう、肥満、月経痛（月経困難症）、頭痛、更年期障害、エストロゲン、骨粗鬆症、動脈硬化、メタボリックシンドローム、糖尿病、高血圧、脳卒中、骨粗鬆症、変形性関節症をキーワードとしてクロス検索を行った。

4) 検出された報告のうち、治療や診断に関する論文は除外し、疫学に関するものを選び抜いた。また、日本人以外のデータの報告は全て除外した。

結果

得られた論文の一覧を表1に示す。なお、引用した論文には研究対象者の年齢の記載がなされていたが、表中にしめした年齢区分は当該疾患の好発時期が明示できるよう、内容を精読の上著者らが区分した。

考察

「性差に基づいて健康づくりを推進することや疾病管理を行うこと」を実践して行く上で最も重要な点は何をどのようにすべきかを明確な目標を立てることにつくる。そのためには、まず現状を認識しその上で問題点を整理し、目標を打ち立てることが近道となることは言うまでもない。我が国の女性に特有な疾患の発症率に関してのデータは悪性新生物、心疾患、脳血管障害など3大死因に関係する疾患とそれに関係する病態については多くの報告が見なされている。特に心疾患や脳血管障害など、いわゆるメタボリックシンドロームの終末疾患の要因として取り扱われる病態である肥満、耐糖能異常や脂質異常症、高血圧症などについては多くの成績が集積している。特に心疾患や脳血管障害の予防に関しては JLIT(1)、Mega Study(2) と呼ばれる大規模臨床試験が行われ、介入によりこれらの疾患の発症を予防できることが我が国でも実証された意義は大きい。3大死因に挙げられた疾患や骨粗鬆症などは年齢依存性であり、したがってその予防を目的とした健康管理は早期から開始する必要があることが強く示唆される。また、高齢者に特有な疾患でありかつその頻度も極めて多い疾患である骨粗鬆症についても、信頼性の高い発生頻度が報告され、現在では予防や治療のためのガイドラインが作成されている(3)。3大死因疾患とそのリスク病態および骨粗鬆症は年齢依存性の疾患であり高齢者ほど発症が高い。その予防や対策に関する知識に関しても

多くのエビデンスが集積しており、今やそのための予防法をいかにして実践できるか、その方法を探索し実行するところまでできていると言えよう。

一方、性差の観点から女性特有の疾患を俯瞰した場合、年齢以外の要素、すなわち卵巣ホルモンの存在が重要な因子として関与する疾患を捉えられなければならない。上記の心疾患や脳血管障害などは高齢者ほど罹患率も増えてくるがその背景には閉経や両側卵巣摘出後のエストロゲン欠落が脂質代謝に異常を介して関与していることが既に明らかにされている。同様に骨粗鬆症はエストロゲン欠落により骨吸収が亢進してくるために発症することが知られている。したがって、これらの疾患の発症予防は長年にわたり蓄積された生活習慣の歪みを改善することに加え、女性ホルモンの欠落の観点からも論じられる必要がある。閉経後女性の健康増進をはかる目的で開発されたホルモン補充療法(HRT)はまさにこれらの疾患に対し最も有用な治療法の一つであると考えられていた。しかしながら、2002年に米国で報告されたWomen's Health Initiative(WHI)試験の結果(4)は、有用性よりもリスクの方が高いとの結論を提示したために、HRTは世界的に忌避される傾向となってしまった。しかし、WHI試験に関しては多方面から解析と評価が加えられ、現在ではHRTのリスクは年齢依存性であり(5)適切な使用はむしろメリットの方が高いと言われるようになり(6)、正解的にHRTの指針が作成されるようになってきた。本邦でも日本産科婦人科学会と日本更年期医学会が協同でより安全性を目指したホルモン補充療法のガイドラインが作成されるなど新たな展開が見られている。WHIでHRTの問題点とされた乳癌リスクに関しては、我が国の調査ではHRTを受けた女性ではむしろ乳癌のリスクは低下していることが明らかにされたが(7)、今後の課題としてHRTをどう普及させて行くかは閉経後女性の健康管理を実践する上で医学的な観点だけでなく医療経済の観点(8)からも極めて重要な課題であると考えられた。

一方、閉経前の女性に特有な疾患としては子宮内膜症、月経困難症、月経前症候群、無月経、子宮・卵巣の良性・悪性腫瘍、乳腺の良性・悪性腫瘍や妊娠関連疾患などが列挙される。月経困難症と子宮内膜症は頻度も高く、既に厚生労働省の班研究でも取り上げられており、その重要性が指摘されているところである。子宮内膜症では多彩な治療法が選択できるようになっており、その治療法の選択基準が望まれるようになってきている。また、卵巣子宮内膜症嚢胞では癌化の問題が、また閉経年齢の早期化などを示す成績が報告さ

れている（結果表参照）、今後も引き続き女性にとっての重要な疾患として認識しておかなければならない。

月経に関する疾患の中で月経前症候群や無月経についての疫学的調査についてはあまり報告が行われていない。月経前症候群は月経困難症に比べて頻度の少ない症状ではあるが本邦における実態は良く解明されておらず今後の課題の一つと考えられた。また、無月経に関しては、以前は視床下部性無月経の頻度が高かったか、現在では多嚢胞性卵巣症候群が増えつつあること（私見）、また多嚢胞性卵巣症候群は子宮内膜癌や耐糖能異常のリスクが高いことなどがトピックスとして検討されてきた。さらに、早発閉経や重度の第2度無月経では骨量減少や脂質異常症のリスクが高まることなどが知られているので、これらの女性の実態調査と生涯を通じた対応法の確立が強く望まれる。

女性の生涯を通じての健康管理上で指摘される問題は適切な食事管理、喫煙の問題が指摘されているが、これらについては改めて述べる必要がないほど、年齢や性差に関係なくあらゆる疾患の発症や増悪因子となっており、その対策をどのように一般生活の中に浸透させて行くかが喫緊の課題である。一方、性感染症に関しては特に若年者の性感染症はその後の不妊症や子宮頸癌の原因としても重要な問題であり、予防に対する啓発と癌検診への参加意識をどのように高めるかが示唆された。

女性の終生を通しての健康管理を行うためには、あらゆる年齢層の女性を対象として、年齢依存性ないしは閉経の有無の観点からどのような疾患がどの世代に好発しているかを一度に調査する必要がある。しかしながら、このような研究は意外に少なく、我が国では Japan Nurse Health Study (JNHS) があるのみである。表2は JNHS で調査された年代別の疾患の発症頻度から予測値を計算したものであるが（9）、1000名当たり一人以上の頻度で発症する疾患として頻度の高いものは高血圧（3.6）、甲状腺疾患（1.96）、脂質異常症（5.59）、胆石症（1.72）、肝炎（1.91）、子宮筋腫（7.72）乳腺症（1.18）が認められている。一方、生存した（集積方法上死亡したものは含まれないので）心筋梗塞、くも膜下出血、脳出血、脳梗塞、乳癌、胃癌、大腸癌、骨粗鬆症の1000名当たりの頻度はそれぞれ0.05、0.07、0.03、0.08、0.56、0.31、0.50であった。

啓発普及に関する課題として表3のような内容が考えられた。

参考文献

- 1) J-LIT Study Group. Relationship between coronary events and serum cholesterol during 10 years of low-dose simvastatin therapy: long-term efficacy and safety in Japanese patients with hypercholesterolemia in the Japan Lipid Intervention Trial (J-LIT) Extension 10 Study, a prospective large-scale observational cohort study. *Circ J.* 2008;72(8):1218-24
- 2) MEGA Study Group. Usefulness of pravastatin in primary prevention of cardiovascular events in women: analysis of the Management of Elevated Cholesterol in the Primary Prevention Group of Adult Japanese (MEGA study). *Circulation.* 2008 Jan 29;117(4):494-50
- 3) 骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン作成委員会、骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン 2006年版 ライフサイエンス出版
- 4) Writing Group for the Women's Health Initiative Investigators. Risks and benefits of estrogen plus progestin in healthy postmenopausal women: principal results from the Women's Health Initiative randomized control trial. *JAMA* 2002; 288: 321-333.
- 5) Rossouw JE, Prentice RL, Manson JE, et al. Postmenopausal hormone therapy and risk of cardiovascular disease by age and years since menopause. *JAMA* 2007; 297: 1465-1477.
- 6)
http://www.aace.com/pub/pdf/guidelines/HRTCVRISKposition_statement.pdf.
- 7) 佐伯俊昭、他 日本におけるホルモン補充療法と乳がん発症 産科と婦人科 2008; 75(6): 728-732
- 8) 西村周三 医療経済学から更年期医療の現状を考える 更年期の対症療法が生む医療費の無駄とは 更年期と加齢のヘルスケア 2006、5(2): 314
- 9) Fujita T., et al. Prevalence of diseases and statistical power of Japan Nurses' Health Study. *Industrial Health* 2007.45:687-694

表1: 抽出された年齢区分毎の健康課題の一覧

対象年齢	健康課題	報告年	論文名、調査名、書名	調査主体、編者	雑誌名	(雑誌の場合)巻、号、頁 (著書の場合)頁
<20	食生活習慣は小児期に形成される	2004	生活習慣病と小・中学生の食生活	南里清一郎	小児科	45:258-266
<20	思春期の肥満は骨密度を減少させる	2003	肥満小児における骨密度の検討	長崎啓祐、他	ホルモンと臨床	23, 51:1033-
<20	若年女性の性感染症は増えている	2007	クラミジア性器感染症の若年女性における拡がり	宮内文久、他	産科と婦人科	74:1680-1683
<20	若年女性の性感染症は増えている	2007	若年女性におけるChlamydia trachomatis, Neisseria gonorrhoeae およびHuman papillomavirusの同時検索	藤原道久、他	日本性感染症学会誌	18:129-133
<20	若年女性の性感染症は増えている	2006	HIV感染爆発前夜 福岡県の性感染症の実態	田中正利	産婦人科の世界	58:65-73
<20	性感卑の予防知識の普及を図る必要がある	2005	10代女性の性感染症へのリスク認識コンドーム使用の利益と障害の価値観に関するインターネット調査	金子典代	日本性感染症学会誌	16:40-45
<20	AIDSは増えつつある?	2005	感染爆発の危機 HIV/AIDSをめぐるわが国の深刻な状況	森澤雄司	Infection Control	14:526-530
<20	若年女性の性感染症は増えている	2004	若年女性におけるHPV感染の現況	藤原道久、他	日本性感染症学会誌	15:149-153
<20	若年妊娠の背景	2004	若年妊娠の臨床的検討 リゾロダクテイング・ヘルスの立場から	戸田稔子、他	思春期医学	22:392-397
<20	若年妊娠は増えつつある	2005	岩手県における10代の妊娠と人工妊娠中絶の実態調査	利部正裕、他	日本産科婦人科学会東北連合地方部会誌	52号:71-72
<20	若年妊婦と性感染症	2003	若年妊婦婦人におけるSTD感染実態に関する多施設共同研究	高桑好一、他	新潟医学会雑誌	117:767
<20	若年女性の喫煙は動脈硬化症のリスクになる?	2004	短大生における喫煙と脂質代謝	井荳利博、他	群馬パース学園短期大学紀要	5:373-378
>19	女性では男性に比べ高血圧,糖尿病,喫煙,家族歴,高コレステロール血症の急性心筋梗塞発症に対する寄与率は低い	2006	Sex Differences of Risk Factors for Acute Myocardial Infarction in Japanese Patients	Kawano H et al.	Circulation Journal	70:513-517

<18	運動の励行は栄養の摂取よりも骨密度に対する効果が大きく、特に中学時代の骨に衝撃を与えるような運動が効果的である	2007	骨粗鬆症の予防と治療ガイドライン 2006年版 若年期から取り組む骨粗鬆症の予防	2007	太田博明	THE BONE	21巻3号 Page305-310
15-18	女子高生のイライラ、めまい、頭痛などの有不定愁訴者では月経不順者が多い	2008	中学・高校生における不定愁訴 第2次性徴との関連	2008	難波梓沙、他	母性衛生	48巻4号 Page451-46
18-20	女性において顎の状態の良い者ほど咬合接触面積が広く、咬合力が大きかった。(男性では顎の状態の良い者ほど有効咬合接触面積の割合が小さく、最大咬合圧が大きかった。)	2006	感圧シート(デンタルプレスケール)を用いた若年者における顎関節症に関する疫学的研究	2006	笹原紀佐子他	口腔衛生学会雑誌	56巻2号、p.148-155
15-17	関節雑音、だるさ感、顎運動痛および開口制限を自覚している者はそれぞれ、35.0%、19.2%、19.3%、および14.0%であった。顎機能異常は多要因性であり、習癖やストレス頻度が高いほど症状発現に影響していることが示唆された。	2004	女子高校生における顎機能異常の自覚症状に影響する要因	2004	竹原順次他	口腔衛生学会雑誌	54巻3号、p.216-223
15-19	睡眠で休養がとれないと答えた割合は全体で25%に見られたが、15-19歳では40%がとれていないと答えている」	2008	平成19年国民健康・栄養調査結果	2008	厚生労働省		
<20	若年より喫煙を始めたものでは、その後喫煙中止をすることが少なく喫煙中止を試みても成功率が低く、より重症のニコチン依存ないしたばこ依存になり、その結果喫煙強度(吸入程度、多量喫煙、喫煙頻度など)が強い	2005	悪影響	2005	榑輪眞澄、他	J. Natl. Inst. Public Health	54(4): 262-277
18-22	痩せの女性ではアポネクチンが低い	2008	女子大学生における「るい瘦」とアポネクチン血中濃度の検討	2008	佐藤浩樹、他	CAMPUS HEALTH	45: 135-140
18-22	女子大生ではBMIが増加すると拒食異常者の発生率が増加し、体重増加への抑制が弱えた	2005	適正体重以下である女子大学生の月経状態、骨格筋重量、骨密度、摂食態度および生活習慣	2005	石垣享	健康医科学研究所成論文集	20: 1-13
>20	日常生活関連因子(睡眠時間が短い「運動習慣がない」など)及び職業(経営者、役人など)は、精神的不満の蓄積に強い関連がある	2006	Associations of Daily-Life Related Factors and Occupations Associated with the Accumulation of Somatic or Psychological Complaints in the General Adult Population of Japan	2006	Sekiguchi K., et al	杏林医学会雑誌	37(4): 102-117
18-22	ストレスは消化管QOL不調に影響を及ぼす	2007	女子大学生における消化管QOL不調とその関連要因について	2007	河原田康貴、他	久留米大学健康・スポーツ科学センター研究紀要	15: 41-45、

>19	メニエール病は男性より女性に多く、発症年齢は60歳代が増加しており、高齢化の傾向がある	2007	メニエール病の疫学と環境因子	大貫純一、他	ENTONI	81号	Page1-6
20-30	大学病院頭頸部診療外来を受診した空気嚥下症患者187名を対象に、心理社会的傾向、頭頸部領域における随伴症状および治療経過について調査・検討した。その結果、患者は20-30代の青年期に多く、69.5%が女性であった	2007	空気嚥下症(いわゆる噛みしめ呑気症候群)と頭頸部不定愁訴に関する臨床統計的検討	木村浩子、他	日本歯科心身医学雑誌	22巻2号	Page73-83
<25	健康な若年者においても、味覚異常の自覚がない程度から中等度の味覚異常者が存在する	2006	若年者の味覚異常に関する疫学調査研究(第1報) 実態およびライナスウイルスとの関連について	佐藤しづ子、他	日本口腔診断学会雑誌	19巻1号	Page62-68
<30	出生順位が第一子を持つ専業主婦では若年層の母親ほどうつ出現率が高く、また、児の年齢が2歳から3歳の時期のうつ発症率は2.3-2.6%と0歳から満1歳までの1.0%前後の発症率を上回る	2005	乳幼児健診に來所した母親のメンタルヘルスに及ぼす因子の検討 対象児の年齢との関連	倉林しのぶ、他	女性心身医学	10巻3号	Page181-186
18-21	出生体重および幼児期の体重増加は若年女性の骨質量の重要な決定因子である	2005	Weight gain in childhood and bone mass in female college students	Saito T, et al	Journal of Bone and Mineral Metabolism	23巻1号	Page69-75
19-25	骨量変化は19-25歳で安定する	2005	骨代謝指標からみた20歳前後における骨リモデリングの推察	尾上佳子、他	Osteoporosis Japan	13巻3号	Page597-599
19-25	若年女性の骨密度は「BMI」「過去の運動習慣」「活動総エネルギー量」に影響される	2005	若年女性における骨密度獲得に寄与するライナスウイルスは？	宮原優子、他	Osteoporosis Japan	13巻2号	Page369-37
>19	女性喫煙者の70%程度は喫煙をストレス解消法の一つと考えている	2004	わが国の一般集団における喫煙をストレス対処とする選択の浸透	島井哲志	行動医学研究	10巻2号	Page93-100
>19	女性のアルコール依存症患者では「アルコール依存症」と「鬱病」や「摂食障害」といった精神疾患が併存している	2008	ICD-10分類によるアルコール依存症者の身体合併症と性差	篠田律子、他	日本アルコール・薬物医学会雑誌	43巻1号	Page25-34
<30	神経性食思不全症での骨粗鬆症の発生頻度は約40%、体重が回復した後も含む骨折率は健康女性と比較して約2~7倍との報告がある	2003	神経性食思不全症における骨粗鬆症	前坂明子、他	Clinical Calcium	13巻12号	Page1570-1576
>20	高血圧や白内障はQOLの低下をみない。筋骨格系疾患のような身体的苦痛あるいは食事制限という精神的苦痛はQOLの障害となる。箇の健康管理はQOLの高い生活のために重要である	2004	QUALITY OF LIFE IN RESIDENTS UNDER THE HEALTH PROMOTION PROGRAM: Improving Quality of Life Through Health Management	杉本しず子、他	Quality of Life Journal	5巻1号	Page59-70

>19	本邦の平均総コレステロール値は、1960年代から2000年代まで継続して上昇傾向がみられている	2008	本邦脂質異常症の現状と脳卒中発症 疫学的検討の変遷	大平哲也、他	成人病と生活習慣病	38巻2号 Page134-138
>19	HDLコレステロール低値と脳梗塞の発症リスクとの関連がみられている	2008	本邦脂質異常症の現状と脳卒中発症 疫学的検討の変遷	大平哲也、他	成人病と生活習慣病	38巻2号 Page134-138
>19	女性の脳卒中では脳梗塞に比べ脳出血の比率が高い	2007	都市部における脳卒中の病型と危険因子の変遷	北村明彦、他	動脈硬化予防	巻4号 Page27-32
20-	女性の頸関節症は20歳代32.2%、30歳代38.3%、40歳代23.5%、50歳代6.1%と20、30歳代に多くみられた。	2008	東京都内就労者における質問票による頸関節症有病率調査	杉崎正志他	日本頸関節学会雑誌	20巻2号、p.127-133
21-30	ウエスト周囲径あるいはウエスト/身長比は、肥満症や内臓脂肪型肥満症を判定する上で若年成人女性においても有用と考えられた。しかし、冠危険因子とウエスト周囲径あるいはウエスト/身長比との間に相関を認められたのはHDLコレステロールのみであり、若年成人女性でのウエスト周囲径やウエスト/身長比の使用には限界がある	2005	若年成人女性におけるウエスト周囲径およびウエスト/身長比と冠危険因子との関連	坂本静男、他	肥満研究	11巻3号 Page296-300
20-30	勤労者の体力の現状を10年前の勤労者の体力と比較検討したところ、現在の勤労者は10年前に比べ20歳代、30歳代の筋力、敏捷性、平衡性、および柔軟性が低下し、特に20歳代の低下が顕著であった	2005	10年間ににおける勤労者体力の推移と相違	坂手誠治、他	体育の科学	55巻6号 Page463-469
18-29	食品や野菜の摂取頻度は食物摂取習慣不良群で全体的に少なく、反対に嗜好品は多い。その他の生活習慣も悪い人の割合が多かった。健康診断結果では、食物摂取習慣不良群の女性ではヘモグロビンが低かった	2002	一企業の若年労働者における食物摂取習慣と食品摂取頻度及び健康診断結果との関連	高瀬悦子、他	北陸公衆衛生学会誌	28巻2号 Page81-88
>20	女性喫煙者の6割は禁煙を試みたことがあり、2/3は禁煙したがついている	2003	平成15年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
>20	受動喫煙の機会の多いものほど血中ニコチン濃度は高い	2003	平成15年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
20-30	朝食の欠食率は20歳代で最も高く、約2割にみられる。20歳代の一人世帯に限ると約3割になる	2005	平成16年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
>20	女性の5割は脂肪からのエネルギー摂取が25%を超えている	2005	平成16年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		

>20	野菜摂取量の平均値は290gであり、「健康日本21」の目標値である350gに達していない	2008	平成19年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
>20	食塩摂取量の平均値は、男性で12.0g、女性で10.3gとなっており、食塩摂取の目標量である男性10g未満、女性8g未満に達していない。	2008	平成19年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
20-44	性器クラミジア感染症、性器ヘルペスウイルス感染症は、女性患者の方が多い。	2005	感染症発症動向	国立感染症研究所		
20-44	性器ヘルペスウイルス感染症の女性患者は、増加傾向にある。	2005	感染症発症動向	国立感染症研究所		
20-44	女性の喫煙習慣は増加している	2004	平成16年国民栄養調査	厚生労働省		
20-44	成人喫煙率は、男性で五二・八％、女性で一三・四％。男性は三十代、四十代が高く、女性では二十代、三十代の喫煙率が高くなっている。未成年者の喫煙率は、男性一九・〇％、女性四・三％になっている	1998	喫煙と健康問題に関する実態調査	厚生労働省		
20-44	妊婦は食事摂取基準値を満たしていない	2005	平成16年国民健康栄養調査、	厚生労働省		
20-44	20-29歳女性の低体重者の割合は増加している	2005	平成16年国民健康栄養調査、	厚生労働省		
20-44	低体重の女性は低体重であるにもかかわらず、体重を減らそうとしている	2005	平成16年国民健康栄養調査	厚生労働省		
20-44	若年女性において適切な栄養摂取ができていない懸念がある。	2005	平成16年国民健康栄養調査、	厚生労働省		
20-44	若年女性の痩せは骨密度を低下させる	2005	他ライフスタイルと若年女性の骨密度(第3報) 骨密度とリヌクアクターの検討	村山より子	日本ウエブスヘルズ学会誌	4:17-18
20-44	若年女性の痩せは骨密度を低下させる	2006	若年女性における「やせ」と運動習慣の違いが体力および骨密度に与える影響	丸山麻子、他	体力科学	55:799
20-44	不妊で悩む女性ではサポートが不足している	2005	不妊に悩む人々の問題点と必要とされる支援	坂井美和、他	熊本母性衛生学会誌	8:59-66
20-44	不妊で悩む女性ではサポートが不足している	2008	不妊女性が受療中に経験した非支援的状況の分析	阿部正子、他	日本生殖看護学会誌	5:4-10
20-44	不妊で悩む女性ではサポートが不足している	2008	少子化対策 行政からみた妊娠・出産・周産期への支援体制	小林秀之	周産期医学	38:00:00
20-44	不妊で悩む女性ではサポートが不足している	2008	不妊治療を受ける患者に対する支援のあり方に関する研究	新野由子、他	母性衛生	49:138-144

35-39	35-39歳は子宮頸がん罹患率のピークである。(23.4人/人口10万人)	2002 地域がん登録全国集計	がんセンター	
20-44	月経関連症状は、家庭生活に影響を与えている。	2005 Dysmenorrhea in Japanese women	Osuga Y, et al	International Journal of Gynecology and Obstetrics 88: 82-83
20-44	月経関連症状は、家庭生活に影響を与えている。	2005 Dysmenorrhea in Japanese women	Osuga Y, et al	International Journal of Gynecology and Obstetrics 88: 82-83
20-44	月経関連症状は、女性の就労に影響を与えている。	2005 Dysmenorrhea in Japanese women	Osuga Y, et al	International Journal of Gynecology and Obstetrics 88: 82-83
20-44	子宮内膜症の危険因子は何か?	2005 子宮内膜症症例における臨床疫学的検討(多施設共同研究)	山口雅幸	日本産科婦人科学会新潟地方部会誌 93:53:00
20-44	子宮内膜症は癌化する?	200 学調査 17年間の追跡調査による前方視的検討	小林 浩	産婦人科の実際 54: 677-682
20-44	多嚢胞性卵巣症候群はメタボリックシンドロームの危険因子である	2008 PCOSとメタボリックシンドローム	森山貴子、他	HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY 15: 295-300
20-44	排卵障害は耐糖能異常のリスクになる?	2008 排卵障害とインスリン抵抗性 非PCO性排卵障害婦人とインスリン抵抗性	中川浩次	日本産科婦人科学会雑誌 60: N236-238
20-44	出産後の妊娠糖尿病は糖尿病への移行が高い	2008 実態 妊娠糖尿病患者の出産後の耐糖能の実態	加治屋昌子、他	糖尿病と妊娠 8: 108-112
20-44	代謝異常合併妊娠の頻度は、1996年の0.55%からへと増加している	2005 妊娠中に診断された糖代謝異常妊娠の実態 糖代謝異常妊娠全国調査(1996~2002年)	佐中真由実	糖尿病と妊娠 5: 37-41
20-44	2002年には0.87%へと明らかに増加している	2005 当科および関連施設における妊娠糖尿病(GDM)の疫学的検討	藤松正明、他	北海道産科婦人科学会誌 47: 20-27
20-44	内蔵脂肪肥満型の妊娠糖尿病は糖尿病移行へのハイリスクである	2006 糖尿病合併妊娠-内科専門医-	和栗雅子	周産期医学 36: 1139-1145
20-44	週周病は早産のリスクとなる	2008 妊婦の週周病と早産との関連について 文献検討	平野絵美、他	川崎医療福祉学会誌 18: 227-237

20-44	嚔周病は早産のリスクとなる	2007	基礎と臨床のクロスオーバー 嚔周病と早産・低体重児出産	和泉雄一	The Quintessence	26: 135-141
20-44	子宮内膿症はPIDのリスク因子となる	2008	卵巣子宮内膿症はPIDのリスク因子か?	種市明代、他	日本産科婦人科学会関東連合地方部会誌	45: 128
20-40	20-39歳年齢層女性の致死的心塞栓患者の38.5%で妊娠または出産が関与している	2007	Pulmonary embolism is an important cause of death in young adults.	Sakuma M et al	Circ J.	71(11):1765-70
30-40	30-40歳代の女性の偏頭痛の有病率は約18%に達する	2005	片頭痛の疫学	竹島多賀夫	脳21	8: 411-417
成人	女性の顎関節症は20歳代32.2%、30歳代38.3%、40歳代23.5%、50歳代6.1%と20、30歳代に多くみられた	2008	東京都内就労者における質問票による顎関節症有病率調査	杉崎正志、他	日本顎関節学会雑誌	20巻2号 Page127-133
出産後	女性の四分の一は出産後に不安を抱いている	2008	A Six-month Follow-up Study of Maternal Anxiety and Depressive Symptoms among Japanese	Sato Y	Journal of Epidemiology	18巻2号 Page84-87
20-44	卵胞期に比べ黄体期では交感神経活性が有意に高い。一方、副交感神経活性は卵胞期において優位である	2004	Cardiovascular Reactivity to Mental Stress: Relationship with Menstrual Cycle and Gender	Sato N, et al	Human Science	23巻6号 Page215-22
20-64	若年層とくに若年女性では起立性調整障害を伴うめまいの割合が多くみられる	2004	起立性調整障害を伴うめまいとストレスの関連性	青木光広、他	Equilibrium Research	63巻4号 Page308-314
19-44	アトピー性皮膚炎の有症率は女性6.0~10.0%で男性に比べ有意に高い。過去8年間で有意な増加傾向は認められなかった。増悪因子はダニやハウスダストが減少し、替わって汗乾燥、ストレスなどが増加した。	2004	疫学調査に見る動向 長崎大学新入生健診におけるアトピー性皮膚炎についての検討 1995~2002年のまとめ	竹中基、他	臨床と薬物治療	23巻2号 Page92-96
<45	月経異常は若年女性において骨量減少のリスクファクターである。特に無月経は著明な低骨密度をひき起こす	2003	性腺機能低下症と骨代謝	岡野浩哉、他	HORMONE FRONTIER IN GYNECOLOGY	10巻4号 Page363-368
(青年期~成人)	女性と男性では顎変形への認識に違いが見られ、女性はいずれも主観的に、男性は客観的に認識している傾向がみられた。	2007	顎変形症患者の心理傾向と患者自身か顔貌を気にする時期	山中 知他	日本歯科心身医学雑誌	22巻1号、p.11-16
25-34	受療者率は女性が男性より高い割合を示した	2005	職域における成人の現在歯および健全歯の保有歯数からみた歯科受療状況	吉野浩一他	ヘルスサイエンス・ヘルスケア	5巻1号、p.65-68

>30 30歳以上の女性で定期的に乳房自己検診を行っている割合は27.9%

2004

Breast self-examination in middle-aged or elderly females and examination of BSE-associated factors

田淵紀子、他

日本更年期医学雑誌

12巻2号 Page247-256

15-29 BMI18.5未満の痩せの割合は15-19歳で16.3%、20-29歳で23.4%に見られた。女性全体では10.4%。

2003

平成15年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-29 20-29歳の女性の朝食欠食率は24.9%で他の世代に比べて高く、また過去に比べて増加している

2008

平成19年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-40 一般女性が月経関連の自覚症状を訴えてすべて医療機関を受診したと仮定した場合、月経痛を訴える女性の9.1%が子宮内膜症と、過多月経の9.3%が子宮筋腫と、月経不順の19.4%が卵巣機能不全と診断される

2005

女性の各ライフステージに応じた健康支援システムの確立に向けた総合的研究 寺川 直樹

厚生科学研究成果データベース

20-25 現在20~25歳の成人女性では風疹抗体保有率が約85%で、以前に比べて減少している

2004

若年女性における風疹抗体保有率とワクチン接種 寺田 喜平

小児科

45巻9号 Page1561-1567

40-60 カルシウム摂取量が初回も10年後も所要量を満たしていない者はそうでない者に比べ骨密度減少が大きい傾向にある

2004

健常中高年女性における腰椎骨密度10年間の変化に及ぼす体格及びライフスタイルの影響 閉経状態別検討 小坂谷典、他

Osteoporosis Japan

12巻2号 Page275-279

20-40 60歳代女性に比べ20~40歳代女性では運動習慣のある者の割合が低い

2003

平成15年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-40 脂肪からのエネルギー摂取割合は、20~40歳代女性で、適正比率である25%を超えている

2003

平成15年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-39 20-30歳代は60歳代に比べ野菜摂取量が少ない

2003

平成15年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-40 魚介類と肉類の摂取量は、30歳代まで肉類の摂取量が多いが、40歳代からは逆に魚介類の摂取量が多い

2003

平成15年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

成人 20歳以上の女性の3割は一日睡眠時間が6時間未満である

2008

平成19年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-49 20-49歳の女性の現在の喫煙率は17%であり他の世代に比べて高い

2008

平成19年国民健康・栄養調査結果 厚生労働省

20-40	1997年度における子宮内腫瘍の受療患者数は128,187人と推定され、平均31.1歳で発症し、平均32.5歳で診断を受け、受診患者の平均年齢は35歳であった。平均通院期間は60日、月に1~2回通院しているものが76%であった。また、手術症例を対象とした際の生殖年齢女性における子宮内腫瘍の頻度は37%と高率である	リゾダクテニアヘルスからみた子宮内腫瘍の実態と対策に関する研究	武谷雄二	厚生科学研究成果データベース
>39	血清中の総カロチン高値は循環器疾患の死亡リスクを低下させる	Cardiovascular Disease Mortality and Serum Carotenoid Levels: a Japanese Population-based Follow-up Study.	Ito Y, et al	Journal of Epidemiology 16:154-160
40前後	普通体重の被験者、及び喫煙を止めたか、又は喫煙経験の無い被験者でWBC数は有意に低かった	Having More Healthy Practice was Associated with Low White Blood Cell Counts in Middle-aged Japanese Male and Female	Otsuka R, et al	Workers Industrial Health 46(4): 341-347
20-49	50歳以上では約25%において1回30分以上の運動を週2日以上実施し、1年以上継続しているが、それ以下の世代では15%前後にとどまる。	平成19年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	厚生労働省
成人	母親の瘦身志向は次世代の健康に与える？ 喫煙は歯周病を増悪する	母親の瘦身志向が次世代の健康に与える影響 喫煙と歯周病	重田公子、他 栗石聡	東京農業大学農学集報 53:41-45 Clinical Calcium 17:226-232
19-44	若年成人女性においてコーヒー摂取は歯牙喪失の有症率の高まりと関連がある	日本人妊婦における飲料摂取と歯牙喪失有症率との関連 大阪母子保健研究	田中景子、他	福岡医学雑誌 99巻4号 Page80-89
14-48	日本人中高年女性の毛髪密度は、外見上では脱毛とわかないまま年齢とともに低下する。脱毛は約40歳から発現し、主因は毛髪密度と太い毛髪の割合の低下である	Characteristic features of Japanese women's hair with aging and with progressing hair loss	Tajima M et al	Journal of Dermatological Science 45巻2号 Page93-103
45-55	30-34歳の乳がん罹患率は19.1人/10万人だが、45-49歳まで増加する。	2002 地域がん登録全国集計	がんセンター	
45-55	30-34歳の乳がん罹患率は19.1人/10万人だが、45-49歳まで増加する。	2002 地域がん登録全国集計	がんセンター	
45-55	45-49歳がん罹患率のピークである。(137.9人/人口10万人)	2002 地域がん登録全国集計	がんセンター	

<49	閉経年齢が49歳未満であった中年女性は49歳以上であった中年女性に比べて、冠心臓血管による死亡のリスクが増加する	Relationships of Age at Menarche and Menopause, and Reproductive Year with Mortality from Cardiovascular Disease in Japanese Postmenopausal Women: The JACC Study Journal	Cui R., Iso H et al	J of Epidemiology	16:177-184
>40	中年女性では血圧管理は心血管疾患の死亡率の予防に影響する	Age-Specific Relationship between Blood Pressure and the Risk of Total and Cardiovascular Mortality in Japanese Men and Women	Saitenchi T., et al	Hypertension Research	28:901-909
>40	高血圧の今日の基準($\geq 140/90\text{mmHg}$)では40歳以上の約40%が高血圧と診断される	高血圧の疫学 わが国の疫学データが示す高血圧管理の重要性	藤島正敏	カレントテラピー	21巻10号 Pages888-893
>40	手の変形性関節症(OA)の有病率は加齢とともに増加する	Prevalence and involvement patterns of radiographic hand osteoarthritis in Japanese women: the Hizen-Oshima Study I	Toba N, et al	Journal of Bone and Mineral Metabolism	24(4):344-348
45-55	閉経後女性では、歯周病の進行過程においてエストロゲン欠乏により顎骨の歯槽骨骨密度も減少し、歯周ポケット内ではT細胞やB細胞の異常、インターロイキン(IL)-1, IL-6, IL-8, 腫瘍壊死因子(TNF)- α などのサイトカイン、炎症性マデイエーターであるプロスタグランジンE2の異常亢進を促し、発症した歯周炎の進行過程にかなり影響を及ぼすことが考えられる。	【歯科からみた骨粗鬆症 歯周病と骨粗鬆症に関連はあるのか】 歯周病と骨粗鬆症の関連性 疫学からみた歯周病と骨粗鬆症	稲垣幸司他	Clinical Calcium	16巻2号、p.269-277
45-55	海面骨骨密度は男性が女性より有意に高い値を示し、閉経後女性が未閉経女性より有意に低い値を示した。顎骨は全身の骨と同様に性差、閉経の影響を受け、骨量、骨質ともに変化していることが示された。	下顎骨の骨量と骨質に対する性差 および閉経の影響	宗像源博	日本口腔インプラント学会誌	19巻4号、p.430-438
>40	働く世代における歯科保健に対する関心や認識は、女性および40歳以上に高く、歯磨きや歯科健診の受診などの保健行動も男性より女性が多く実践していることがわかった。	働く世代を中心とした歯科保健医療に関する実態調査 函館歯科医師会によるヘルスプロモーション活動の展開	齊藤恭平他	日本歯科医療管理学会雑誌	41巻3号、p.143-153

45-55	ヒト下顎骨の検討では、海面骨骨密度は男性が女性より有意に高く、海面骨幅は女性が男性より有意に大きかった。閉経による影響では閉経女性の海面骨骨密度は未閉経女性より有意に低く、海面骨幅は有意に大きかった。	2005	閉経に伴う顎骨の変化と歯科インプラント治療	春日井昇平	Osteoporosis Japan	13巻4号, p.915-919
45-55	中高年女性のセクシヤリテイの問題は卵巣機能低下や加齢に基づく粘腹の萎縮・菲薄化に伴う不快な生殖器症状(萎縮性陰炎)と局所に病的所見は認めないが性行動の変動や性反応に現れる生殖器症状(外陰痛など)に大別できる	2008	中高年女性とセクシヤリテイ	牧田和也、他	産婦人科治療	96巻6号 Page1030-1034
45-55	更年期不定愁訴と関連する臨床心理的要因には、(1)一般活動性の衰退と喪失、(2)生活上のストレス、(3)人間関係の喪失、(4)限界への直面、などがある	2008	中高年女性の不定愁訴とその対応	堂地勉	産婦人科治療	96巻6号 Page981-986
>42	2個以上の椎体骨折は39.5%で症状の悪化を認めQOLを低下させる	2007	椎体変形とQOL 地域在住中高年女性における新規椎体骨折とQOL	青柳潔	Osteoporosis Japan	15巻3号 Page524-526
45-55	中年における女性の尿失禁は男性の尿失禁より頻度が高く、腹圧性尿失禁が切迫性尿失禁より多い	2005	中高年女性の尿失禁とその対策	西沢理、他	産婦人科治療	91巻4号 Page385-391
45-55	運動習慣を有する中高年女性は同地区同年代の運動習慣の無い女性に比して睡眠習慣の規則性が高くかつ睡眠維持が良好な状態にある	2004	中高年女性における運動習慣の有無と睡眠習慣および睡眠健康度との関係	水野康、他	体力科学	53巻5号 Page527-536
13-79	成人女性でジツクハハウス症候群と判断された割合は、疾患の定義の仕方により3.0~23.3%、小児は5.6~19.8%であった。原因環境因子は小児・成人とも「シヤンゾー・化粧・香水」「壁や床の建材」において「塗料」が上位であった	2004	本邦におけるジツクハハウス症候群の大規模疫学調査	子安ゆうこ、他	アレルギー	53巻5号 Page484-493
30-95	本邦成人女性の約55%がビタミンD欠乏状態にある。血中25-OH-D3濃度が高いほど骨密度が高く骨折有病率の低下を認めた	2004	高齢者を中心とする日本人成人女性のビタミンD栄養状態と骨代謝関連指標について	岡野登志夫、他	Osteoporosis Japan	12巻1号 Page76-79
>40	BMI25以上の肥満は40-49歳で19.8%に存在、加齢とともに増加し、60-69歳では30%が肥満。	2003	平成15年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		
>40	女性ではメタボリックシンドロームのリスクは40歳以上で高くなる	2005	平成16年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省		

>40	糖尿病の可能性は40歳以降で高まり、40歳以上の女性の24%は糖尿病もしくはその可能性が強く疑われる。	2007	平成18年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
>40	糖尿病もしくはその可能性を否定できないものの人数は増加しており、平成14年には1600万人を超した(男性含む)	2007	平成18年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
>40	女性の高血圧症は40歳以降に増加する。40-49歳における有病者は14.2%、50-59歳で39.2%、60-69歳で57.6%。	2007	平成18年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
>40	40歳代の女性の25%は脂質異常の疑いをもつ。50歳以上は更に増え半数以上でその疑いがある。	2007	平成18年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
>40	40-74歳の女性の5人に1人がメタボリックシンドロームが強く疑われる者又は予備群と考えられる	2007	平成18年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
40-50	糖尿病が強く疑われる40歳以上の女性のうち治療を受けているものうち、40%はほとんど治療を受けたことが無い。特に40-49歳の世代では70%が治療を受けていない	2008	平成19年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
15-60	ストロクは多少ありを含めると女性全体の64.3%にみられた。15-59歳の女性では年齢に關係なく22%前後で大いに有りと答えた	2008	平成19年国民健康・栄養調査結果	厚生労働省	
成人	骨粗鬆症の予防に対し栄養と運動は不可欠な要素である	2005	栄養と運動は骨粗鬆症予防に役立つか、栄養改善による骨粗鬆症の予防 長期コホート研究の結果から	吉村典子	Clinical Calcium 16:1030109
成人	メタボリックシンドローム 閉経は動脈硬化症の大きなリスクである	2007	【中高年女性のトータルヘルスケア	河野宏明	臨床婦人科産科 61巻7号 Page939-943
24-91	膝伸展筋力は、男女とも60歳代以降で有意な低下を認め、膝OA gradeの進行とともに低下する	2007	膝伸展筋力の加齢変化と変形性膝関節症との関連	渡辺博史、他	運動療法と物理療法 18(4):286-291
19-64	女性の大うつ病有病率は過去喫煙者と関連があり、喫煙からうつ病への影響が示唆された	2004	日本の職域における喫煙とうつ病の関連	竹内武昭、他	Journal of Occupational Health 46巻6号 Page489-492
15-	顎関節の雑音を自覚する者の割合は、ほとんどの年齢層で女性の方が高い。	2005	平成17年歯科疾患実態調査	厚生労働省	
15-	顎関節に痛みを自覚する者の割合は、ほとんどの年齢層で女性の方が高い。	2005	平成17年歯科疾患実態調査	厚生労働省	

成人	男性は歯周病のリスクが高いにも関わらず、継続受診者が少なかった。(女性は継続受診率が高い)	2007	地域における14年間の歯周疾患予防活動の評価	山本龍生他	口腔衛生学会雑誌	57巻3号、p.192-200
6-90	ドライマウスとの頻度は加齢と共に増加し、男性より女性に多い傾向が認められた。	2007	岐阜市近郊の一般住民におけるドライマウスの実態に関する研究	土井田 誠他	日本口腔科学会雑誌	56巻3号、p.301-308
成人	ホルモン補充療法を受けた日本人女性において乳癌発生率の増加はない	2008	No increase of breast cancer incidence in Japanese women who received hormone replacement therapy: overview of a case-control study of breast cancer risk in Japan	Saeki T et al	International Journal of Clinical Oncology	13巻1号 p8-11
成人	未治療口腔癌患者を対象とした研究により、女性では口底部、口峽咽頭部の発生頻度が低いのに対して、歯肉や頬粘膜の発生頻度が高く、男女間の比較では頬粘膜の55.0%、上顎歯肉の69.2%は女性に発生した。	2003	口腔扁平上皮癌の性差に関する研究	平塚博義他	日本口腔外科学会雑誌	49巻10号、p.570-573
成人	Helicobacter pylori(H.pylori)感染は胃癌の強力な危険因子であるが、さらに、喫煙、高食塩食、高血糖は胃癌の発症リスクを有意に上昇させる	2009	【久山町研究2009 Update】生活習慣病としての胃癌	池田文恵、他	医学のあゆみ	228巻4号 Page294-297
成人	糖尿病・耐糖能異常と高血圧は動脈硬化を促進して認知症の危険因子となる	2009	【久山町研究2009 Update】地域住民における認知症の実態	清原裕、他	医学のあゆみ	228巻4号 Page289-293
成人	糖尿病は心血管病発症の独立した有意な危険因子となり、空腹時血糖値150mg/dl以上または2時間血糖値350mg/dl以上で定義した重症糖尿病では、悪性腫瘍の死亡率が有意に上昇する	2009	【久山町研究2009 Update】糖尿病の発症要因と予後	土井康文、他	医学のあゆみ	228巻4号 Page276-280
成人	正常血圧者の追跡調査によれば、飲酒や肥満、およびインスリン抵抗性は高血圧発症の有意な危険因子となる	2009	【久山町研究2009 Update】高血圧の発症要因とその予後	福原正代、他	医学のあゆみ	228巻4号 Page272-275
成人	CRP値は皮脂厚(背中)および皮脂厚(脇腹)とそれぞれ正相関する	2008	軽度肥満女性におけるCRP濃度は皮下脂肪と正相関し、ウエスト周囲と相関しない	平井千里、他	肥満研究	4巻3号 Page226-234
成人	健常中高齢女性において、身体活動量と体脂肪量は、HDL-CやsdLDL-Cといった血液プロファイルに影響を与える	2008	健常中高齢女性における身体活動と健康関連因子との関連	市村志朗、他	運動療法と物理療法	19巻3号 Page217-222